
BAR「紫堇」

杉岡 龍治 B4tBwTdtrQ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A R「紫堇」

【Nコード】

N 9 4 0 9 Y

【作者名】

杉岡 龍治 B 4 t B W T d t r Q

【あらすじ】

B A R「紫堇」に通う主人公。

友人であるマスターとの何気ない時間

俺は毎晩の様に通っているBAR「紫堇」にいる。スピーカーから流れてきたアンディ・ウィリアムスが歌う「Moon River」を聞きながら、カウンターの一番奥の席で、麒麟淡麗グリーンラベルを飲んでいた。

「おまえなあ、せっかくウチみたいな本格的なバーに来ているんだからよ、たまにはカクテルとか頼んでみるよ」

友人でもあるこの店のマスターの山岡が、グラスを磨きながら店の雰囲気壊すような甲高い声で言った。自らの腕の見せ所がない事にとっても憤慨している様だ。カクテルを作る技術はたしからしいが、こいつは喋らない方が店の為にも良いと俺は思う。地下鉄の駅に近く、割と栄えた繁華街にあるこの店は、小さいながらも雰囲気の良い店だったが、今日の客は開店からまだ俺しかいない。

「うるせえな、俺はこれが好きなんだよ。飲みやすいし苦さもちょうど良いんだ。サッポロ黒ラベルだと俺には苦すぎるんだよ。それにウイスキーなんかはキツ過ぎて飲めねえよ。カクテルは、ライムサワーとかなら飲めるけどな」

「バカ野郎、居酒屋行けよ。この野郎。おまえの相手だけだと、東京の老舗バーで修行してきた俺の腕も鈍るじゃねえか」

「この店に客が来ないのは俺のせいじゃねえよ。おまえのその態度と妙に甲高い声が悪いんだ。だいたい俺がどれだけこの店の売り上げに貢献していると思っているんだ」

「声は生まれつきで仕方ねえよ。おまえは俺を産んだ母ちゃんにケチを付けようって言うのか？売り上げに貢献とか言うがな、いつもツケだろう。そんなんだから、嫁さんにも逃げられるんだよ」

「いつか出世払いで払うって、いつも言っているだろ？それに嫁さんと離婚したのは性格の不一致でだ」

「自営業がどうやって出世するんだよ？いいかげんに探偵なんて

ヤクザな家業は辞めちまいな」

俺は確かに探偵だ。浮気調査や犬の散歩、老人宅の買い出しに、頭が可哀想になってしまった人の身内から頼まれて、心の病院に連れて行ったりする。冬場は独居老人の家の周りの除雪が主力となる。基本的には何でも屋だ。だけでもやつぱり探偵とは、バーがよく似合うであろうから、俺はこのバーで飲んでいるのだ。

「一人で暮らして、別れた嫁さんに娘の養育費を払うには十分な稼ぎはあるよ」

「だったら、ウチの店のツケも払え」

「うるせえな。そう言えば、出来たちやった結婚したお前の16歳の嫁さんは元気か？妊娠中でもやっているのか？」

「元気だし、お腹の子も順調だ！！それに安定期に入れば妊娠しても無理しなければ出来るんだよ。お前だつてやっていただろ？」

「やるわけねえよ。俺は口だけだつたぞ？」

「大差ねえよ！！」

下品な会話が続く中、店の中に流れる曲がブレンダ・リーの歌う「End of the world」に変わった。

「いいか、俺たちも来年には40だ。もう人生の半分以上は生きた計算だ。俺はこの店を持たし、若い嫁さんもらつて、子供ももうすぐ生まれる。それは割と幸せな人生だ。お前はどうか？嫁さんは出て行つて、小さな娘とは離ればなれだ。浮気調査なんかして幸せか？寂しくないのか？」

山岡は空いた俺のグラスを下げ、四杯目の新しい麒麟淡麗グリーソンの注がれたグラスを置くと、そう言った。

そりゃあ寂しいさ。嫁さんとはかく、離れて暮らす娘はまだ五歳でちょうどかわいい盛りだ。

「寂しいわけ無いだろう。一人暮らしは気楽なもんだよ。俺には16歳の嫁さんをもらつたお前が信じられないねえ」

涙声だった。強がりと言うのはいつもの事だ。そんな中、夜も更けて遅くなった頃、六人連れの客が珍しくやってきたので、俺を含

めると一人の座席が足りない事になる。

「また来る」

山岡は席を立った俺に向かって、ありがとうございましたと普段なら言わないことを言っていた。お客達が山岡にオーダーを始める。

「私はロイヤル・クローバー・クラブ」

「俺はバラライカ」

「じゃあ、私は電気ブランを三ツ矢サイダー割でお願いします」

「僕は侍・ロックを」

「トム・アンド・ジェリーを下さい」

「僕はヴァージン・ピニャ・コラーダを」

「ワード・エイト下さい」

山岡が少し焦っている様子を見て、俺はニヤつきながら店のドアを閉める。俺が雇ったアルバイト達は、良い仕事をしてくれたと思う。どうか山岡の腕が鈍っていません様にと、俺は神様仏様に祈ってやろうと思った。

(後書き)

2 c h

創文板掌編冬祭り2011

参加作

第16位

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9409y/>

BAR「紫菫」

2011年11月28日01時54分発行